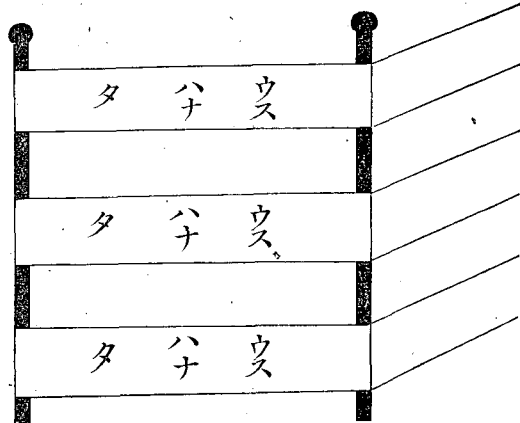
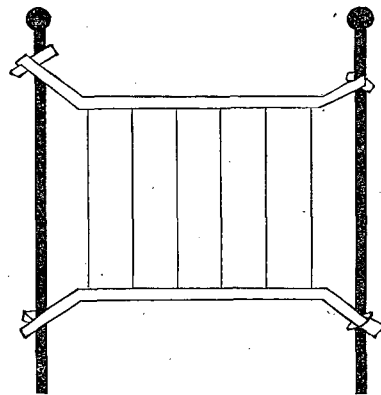


式正の幕の用度ありや不見及候也、又幄の屋を構らるゝには、縹の布を幕串へからみ付て、尋常の幕を張りたるごとくにする、



如此三布カ四
布間テ一布程
ヅ、アケテ張
らるゝ也、幕串
尋常のごとし



八布也、
長サ四五尺也、
依テ横へ長し、

幄は八布也、上下には一寸程づゝの紐ありて、夫にて幕串へ結付る、

〔安齋隨筆 後編 三〕一幕罽の名 或書に云、幕の罽の名の事、一ハチツケ罽、又一ノ罽とも、二ハ物見

の罽、三ハ中ノ罽、四はおさめの罽、五ハまば引、如是申べし、常の時云也、陣中にてはまといふべからず、貢といふむばくといふべし、幕、マク

〔貞丈雜記 十 一〕後三年の繪に見えたる幕、四幅なり、五幅の幕一ツ見えたり、何れも上の幅二幅は黒く、下の方は白、又は上二幅白、下二幅黒もあり、紋はかりがねを書きたるもあり、鳩を向ひ合せて書きたるもあり、紋の付け所は、何れも上一幅に紋を書きたり、義家の陣御座所には、赤き幔幕なり、青白などにててもつかうの地紋あり、か、繪なる故其わかちにはなし、又無紋青白幅交もあり、